

子どもたちが、外務政務官に面会し、 識字の重要性を訴え、途上国への基礎教育支援を求めました。



「世界中の子どもに教育を」キャンペーン 2009”で世界の識字問題について学んだ子どもたち、小学生から高校生の 6 名が、5 月 20 日、外務省で御法川信英外務政務官と面会しました。



「タイに行ったとき、貧しい子どもが売る花を買おうとしましたが、そんなことをしても問題は解決しないと思いました」と訴えかける小学 3 年生にはじまり、「読み書きができない人が 7 億人もいるのは、不公正だと思う」、「貧困の悪循環を断ち切るのが教育です」、「日本でも外国籍の子どもが読み書きに不自由しています」と非識字、教育、貧困の問題を政務官に、一人ひとりが語りかけました。また、日本からの支援については、「国はしっかりと支援をしてほしい」「学校を建てるだけじゃなくて、先生の支援をお願いします」と求めました。



“「世界中の子どもに教育を」キャンペーン 2009”は、全国 152 校、19,683 人が識字問題を学びました。寄せられた感想文のうちの一部を、麻生総理大臣に届けていただくよう、高校生から政務官に手渡されました。



御法川政務官は、「識字問題について学んだみなさんと NGO に敬意を表します」と語り、「貧困の削減のためには息の長い支援が必要です。初等教育、基礎教育支援は重要です」と支援のありかたについて述べ、「教育分野は教員支援にも力を入れていくことを TICAD（アフリカ開発会議）で表明しています」と日本政府の対応を説明するとともに、「支援を受ける側の政府がしっかりしていないといけない」と加えました。

政務官はアフリカへの関心が高く、また、尊敬する人物にマーチン・ルーサー・キング牧師をあげています。参加したうちの一人でキング牧師について 35 枚のレポートを書いたという高校生と「I have a dream.」について語り合う一幕もありました。



キャンペーンを主催する JNNE(教育協力 NGO ネットワーク)事務局からは、「基礎教育分野の国際協力の拡充について」を政務官に渡し、①援助額の倍増、②教員給与などの支援、③児童労働への取組み、④脆弱国への支援強化、を訴えました。

面会の後日、御法川政務官は約束とおり、麻生総理に子どもたちの感想文を手渡していました。

